

歌舞伎と俳句

昭和 4 2 年 卒
小 泉 正 行

はじめに

私は、高校時代の友人の勧めにより平成 1 9 年 1 月から俳句を始めました。其の友人とは約 6 年前、彼が南米チリの現地支店長として赴任する際、歌舞伎を一度も観たことがないとのことから、お祝いを兼ね、わたしの提案で「4 代目松緑襲名興行」（松緑の弁慶、菊五郎の富樫、富十郎の義経）を一緒に観劇しました。そして 4 年後、彼が無事任務を終え帰国してきた年の同窓会の挨拶で彼は、「わずか一回しか観てない歌舞伎ながら、現地のパーテー等で日本の文化のことを聞かれた折、歌舞伎を得意気に話すことができた。しかしかにか自分が日本文化を知らないかを感じ入り恥ずかしくもなったので、早速歌舞伎、能を観たり、陶芸や俳句教室に入り勉強をはじめた」と語ったのです。

私にも、是非一緒に俳句会に入り俳句を詠んでみようとの誘いがありましたが、風流心のない私は柄にもないと断ってきました。（草花の名前もろくに知らないもので）

しかし、私が歌舞伎を勧めておきながら、俳句はいやだとも言えず、又よくよく考えてみれば歌舞伎と俳句には共通するものがあり（四季の変化の美しさを大切にしている所）、何か興味を感じ始めました。

今まで 40 年以上歌舞伎を観続けてきたのだから、花鳥風月を素材に詠めなくとも歌舞伎芝居を素材になら何とか詠めるのではないかと楽観的に考え、彼の所属している俳句会に入り俳句を詠み始めたのです。

俳句関連の本を読み始めたらまさに歌舞伎は先輩格の連歌俳諧の影響を受けており、例えば役者が「俳名」を取り入れたり、歌舞伎用語が季語にあったり、さらには俳句が歌舞伎の科白の中に組み入れられたりしており、私なりの歌舞伎と俳句の関連性の発見がありました。

それに自分が歌舞伎関連の句を詠む上で過去にどのような俳句があるものか知る為に、400 句ほど洗い出しましたが、なかなか上手い句もあり俳句を詠むことが歌舞伎を観る一つの見方にもなると思いました。

又これ等の句を何とか季語で分類してみた「歌舞伎関連俳句集」として仕上げるとか、それぞれの句の内容、背景等を調べることも考えられるのですが、それにはまだまだ時間が掛かります。

取敢えず、今回は今までに解ったことで、極めて基本的なことを中心に書くこととします。

俳名について

歌舞伎は、江戸時代の初め（1 6 0 3 年ごろ）阿国により始まり女性中心の踊りを主体

とした「女歌舞伎」「遊女歌舞伎」等を経ながら、「野郎歌舞伎」へ移り写実を中心とする演劇要素の濃い物語風に変化していくのです。

其の変化の過程において、物語なり科白内容を深く理解することが必要となり、当時流行っていた先輩格の「俳諧」との係りが出来てきたようです。

役者は「素養」として俳諧をはじめとする風流の道をたしなむようになり、俳諧においては俳号、俳名を持ったのです。

特に、「俳名」という場合は、歌舞伎役者が持つ異名を差すことが多い。この文化的流行が役者に広がるにつれ俳名に変化し（現在の俳優名に発展）俳名が役者の愛称ともなり舞台に声を掛ける時などにも屋号同様使用されるようになったのです。

江戸後期になると、名題以上の役者は屋号、芸名の他に俳諧を詠む、詠まないに関係なく必ず「俳名」を持つようになり、後にはその俳名が独立してひとつの名跡となることもあったのです。

因みに、安永三年（1774年）に刊行された概談書「役者全書」によれば、子役を除いた役者225人中186人の役者が「俳名」を持っていたとか。（全体の約80%）

主なる内訳を見てみると、立役45人（全体46人中）、敵役60人（95人中）若女形52人（53人中）となっています。

役者を話題にする時には「俳名」「屋号」で呼ぶことが「通」とされたもので、「市川」とか「尾上」といった名字で呼ぶのは「野暮」とされていました。

役者を「俳名」で褒める習慣は享保（1716～1735）の頃から始まり、鼻肩筋にも積極的に「俳名」を教えていたようです。

では役者で初めて「俳名」を持ったのは誰かといえば、初代市川団十郎とされています。元禄7年（1694年）初代団十郎がはじめて上京した時、俳道に心を寄せ俳人椎本才磨の門弟となり、その折宗匠からもらったのが「才牛」という俳名でした。（宗匠の一字と団十郎当たり役の役名「牽牛」の一字を取って名付ける）

しかし実際にはもっと古くから役者は俳名をもっていたようで、延宝7年（1679年）に刊行された句集「道頓堀花みち」には坂田藤十郎、嵐三右衛門をはじめ上方役者の句が掲載されており、句の下には俳名が記されています。（既に上方では役者が俳諧を好んでいたことが知られよう）

江戸でも初代団十郎をはじめ其の息子の二代目や沢村宗十郎、大谷広次といった同世代の役者が趣味として俳句を楽しんでおり、三人は俳友としてお互いを俳名で呼び合っていたらしいです。

ここで主なる役者の俳名を並べてみますと、

市川団十郎 **初代** 才牛 **二代目** 才牛、三升 栢莚（はくえん） **四代目** 三升
栢莚 海丸 五粒 夜雨庵 海老蔵
七代目 三升 白猿 夜雨庵 二九亭 寿海老人 子福長者
九代目 三升 夜雨庵 寿海 紫扇 団洲 **十二代目** 五粒

尾上菊五郎 初代 梅幸 二代目 梅幸 三代目 (梅幸) 梅寿 三朝 賀朝
 四代目 梅幸 五代目 梅幸 六代目 三朝 七代目 三朝
 片岡仁左衛門 四代目 茶谷 五代目 茶谷 七代目 (我童) 梅里 万磨
 八代目 我童 李童 (芦燕) 十一代目 (我当) 万磨
 十二代目 芦燕 十三代目 茶谷
 中村歌右衛門 初代 一先 一洗 二代目 十暁 歌寿 三代目 (芝翫)
 (梅玉) 四代目 芝賞 (翫雀) 五代目 梅玉 梅苔 魁玉
 六代目 魁春
 松本幸四郎 初代 小見川 男女川 四代目 錦考 錦江 五代目 錦江 錦升
 七代目 錦升 琴松 九代目 錦升

注

() は後に役者名になったもの は後に名乗った俳名

一人の役者がいくつもの俳名を持っているケースが見られますが、これは入門先の宗匠から俳名をもらったり、縁起かつぎ的な意味合いで改めたりしたことによる、又時代が下るにつれて「俳名」を「芸名」にする役者ができたりしたことも理由の一つのようです。例えば文化(1804~1817)初年頃刊行された「劇場新話」によれば、「書き抜き」の表紙に俳名を書くという習慣があった、そのため、仮に自分の俳名を役者名として弟子などに与えた場合、「書き抜き」の表紙の名に困ったのであろうか---といっても表紙に俳名で記すのは名題役者つまり一座の幹部クラスのみで、その他は実名(役者名)だったのですが---- 安永・天明期(1772~1788)にはすっかり「書き抜き」の表紙に俳名を書くという習慣がついたようです。

ところで、二代目団十郎の俳諧の師は松尾芭蕉の門人宝井(榎本)其角でしたが、(1661~1707) 其角といえば、笹竹売りに身をやつした赤穂浪士大高源吾(俳名子葉)に、「年の瀬や水の流れと人の身は」の句を詠んだ逸材の持ち主であり、元禄俳壇の中心として活躍した人物です。

その其角が団十郎のために詠んだ句に、

「今ここに団十郎や鬼は外」 「我雪とおもへば軽し傘のうえ」があり、
 俳人と役者の関係が深かった一つのエピソードとなっています。

更に其角についての歌舞伎とのかかわりを述べてみると、「鞘当」の芝居の中で、名古屋山三郎の衣装模様が其角の俳句がヒントとなり「濡れ燕」となったともいわれています。

不破伴左衛門の衣装は「稲妻のはじまり見たり不破の関」 荷翠の句を基にして
 雲に稲妻の模様

名古屋山三の衣装は「傘に塀かさうよぬれ燕」 其角の句をもとにして
 濡れ燕の模様が決まった

又其角の詠んだ俳句「稲妻やきのふは東けふは西」の句が、幕末の河竹黙阿弥が書いた「弁天小僧」の南郷力丸の科白に組み込まれており、その南郷の科白とは「浜松屋」の場面で、

悪事が露見し開き直り、船頭上がりの自分の経歴を舟尽くしで言う一節で「船足重き行状に、昨日は東、今日は西、居所定めぬ南郷力丸」と啖呵を切っているところです。さらに其の次の場面「稲瀬川勢揃いの場」では、南郷は稲妻模様の衣装を着ており、これも其角の句の上五音と照らし合わせてあります。

以上のようなことから俳句と歌舞伎の関連がうかがい知れるのです。

因みに、現在の歌舞伎役者で「俳名」を持っている主なる役者とその俳名は次のとおり

市川団十郎	五粒	市川猿之助	華果
市川染五郎	桃泉	市川段四郎	笑楽
尾上菊五郎	三朝	片岡我当	寿蘭
片岡秀太郎	萬	中村吉右衛門	秀山 貫四
中村芝間	梅苔	中村雀右衛門	梅斗
中村富十郎	慶舟 琴嶺舎	坂東三津五郎	爽寿
坂東彦三郎	楽善	松本幸四郎	錦升

今日の役者では、幸四郎（俳名錦升 文化文政期の五代目幸四郎が最初の俳名）が、祖父初代吉右衛門（俳名秀山）の影響を受け、多くの句を詠んでいます。

冬ざれに筋隈の紅燃ゆるかな
花冷えのもの憂き流れ吉野川
老騎士とサンチョパンサの朱夏の旅

三津五郎も2001年の10代目襲名の年に黨まどか氏主催の「百代句会」に入り、爽寿（そうじゅ）という俳名を持つてます。

俳句の季語と芝居歳時記

俳句には、季語（季題）という季節を象徴的に示す語があり、一つの句に一つ季語を詠み込むということが原則となっています。

俳句にとってこの「季語」は大きな役割を果たしており、季語は詩情の象徴となるイメージを読み手に与え、又時間と空間の一つのものとして表現することが出来るのです。

（因みに同じ五七五の短歌でも、川柳には季語は意識されていません）

この季語を集めたものは「季寄せ」「歳時記」と呼ばれ、各種の物が出版されています。

その「歳時記」を見ると直接歌舞伎関連の言葉が季語として用いられています

これは当に江戸時代に起こり発展した歌舞伎の狂言及び舞台の形象に当時の人々の日常的な美の感覚、すなわち刻々と変化する季節に寄せる詩情 季節感が色濃く反映していると見る事が出来るようです。

例えば、現代においても人気狂言である「仮名手本忠臣蔵」についてみると如月（陰暦2月）の大序～三段目に始まり、春の四段目、夏の五・六段目、秋の七段目、冬の八～十一段目までというように、四季折々の美しい風物を背景にしながら進行しています。

又歌舞伎には、芝居年中行事なるものがあり、十一月の顔見世興行に始まり、初春狂言、

弥生狂言、皐月狂言、土用狂言、盆狂言、名残狂言とつづきます。

その間に、初午、天神祭、花見、曾我祭、月見等の行事が格式を守りながら行われていました。これらの名目はいずれも俳句の季語となって「歳時記」に採録されています。

ここに俳句における代表的な季語と、歌舞伎の狂言を「歳時記」の形式に習い新年、春、夏、秋、冬、に分類してみます。

(俳句の歌舞伎関連季語)

新年 初芝居 初春芝居 春芝居 二の替 初曾我

春 梅若忌 義士祭 大石忌

夏 夏芝居 夏狂言 土用芝居 水狂言 水芸

秋 九月狂言 地芝居 村芝居 盆芝居

冬 顔見世 良弁忌 近松忌 夕霧忌

以上が、直接歌舞伎を表す季語と思われませんが、私は最近恒例化してきた五月の「団菊祭」と、九月の「秀山祭」がそれぞれ夏、秋の季語になるのではないかと期待しているのです。

次に歌舞伎狂言を歳時記に習い五つの季に分類してみます。

(歌舞伎歳時記)

新年 三番叟 寿曾我対面 矢の根 鏡獅子

春 三人吉三 熊谷陣屋 寺子屋 助六由縁江戸桜 弁天小僧 河連法眼館
藤娘 野崎村 鞆当 桜姫東文章 鏡山旧錦絵 勸進帳 娘道成寺

夏 忠臣蔵5・6段目 絵本太功記・十段目 梅雨小袖昔八丈
源氏店 鈴が森 鳴神 毛抜 かさね 夏祭浪花鑑 四谷怪談
伊勢音頭 お祭佐七

秋 菊畑 道明寺 合邦庵室 大物浦 引窓 沼津 俊寛 紅葉狩
忠臣蔵七段目 鮎屋 先代萩・御殿 阿古屋 魚屋宗五郎
桐一葉 修善寺物語

冬 忠臣蔵九段目 廓文章 天衣紛上野初花・入谷寮 暫
新口村 松浦の太鼓 文七元結 関扉 盛綱陣屋

歌舞伎狂言名題自身の中には、上手く季語が詠み込まれ、その狂言が上演される句の時期を其の一字で示してくれるような狂言もあります。

例えば「助六由縁江戸桜」(江戸桜)「梅雨小袖昔八丈」(梅雨)「夏祭浪花鑑」(夏祭)紅葉狩(紅葉)等 (しかし、現在の毎月の出し物は、季節性より、商業主義で決められている面も否めず、出し物に季節感のないことも多々あるような気がします。このことが歌舞伎俳句を詠む際の難点にもなっていると思われる)

代表的な歌舞伎俳句を 歌舞伎本来の意味を持つ季語を入れて詠んだ句と 一般の俳句季語を入れて歌舞伎を詠んだ句にわけ、四季別にあげてみますと、

の例

午どしの矢の根の馬や初芝居

戸板康二

成田屋の口上ぞ佳し二の替	圓山美津子
似顔絵の団扇手にせり夏芝居	水原秋桜子
地芝居のはねたる潮の香なりけり	加 賀
顔見世や見得極れる松嶋屋	藤井佳代子

の例

羽子板やかむろがおどる明けの鐘（6代目菊五郎）	戸板康二
菜の花にをとこが恋のものぐるひ（保名）	きくの
腕組んで卯月いなせの頬冠り（源氏店）	佐藤吉之輔
放生会べに紐かけて雀籠（引窓）	鬼 城
道行のお俊傳兵衛頬被（堀川）	小森行々子

歌舞伎関連句

今日まで歌舞伎芝居を素材にして多くの俳句が詠まれてきたが、その背景にはやはり前述したごとく芝居そのものに季節性があり俳句でいう「季語」に相当するものがあるためなのでしょう。しかし歌舞伎は特殊な場所(劇場等)に行かないと観られないこと、またその物語の内容等を理解していないと容易に俳句として詠めないというハンデイが有ることから、一般的に花鳥風月を対象に詠むごとく数多くはなく、やはり歌舞伎愛好家といわれる俳人・文人の俳句に限定されるようです。その中から私なりに選んだ俳人や役者等が詠んだ、約400句の中から新年、春、夏、秋、冬の五季節に分け30句程記載します。

新年	初芝居見てきて晴着いまだ脱がず	子 規
	羽子板の団十郎も見得きりて	久保 さとし
	春日出度三日続きし三番叟	猿 翁
	菊五郎の女形ぶり良し二の替	福盛 悦子
	柝の音の冴えて幕開き初芝居	木村 杏子
春	花衣脱ぎもかへずに芝居かな	虚 子
	春がすみ団十郎という名かな(11代目襲名)	万太郎
	荒事と和事の梅とやなぎかな	万太郎
	白拍子紀の山路来る鐘供養(娘道成寺)	秋桜子
	松王の咳き込む肩の春寒し(寺子屋)	吉之輔
	白き足喉に引き搔く春の闇(曾根崎心中)	吉之輔
	忠兵衛の芝居に泣けり四月尽(封印切)	大島 まさ子
夏	あざやかに毒婦の見得や夏の月(宗十郎の会)	康 二
	お多福の泣き顔隠す夏芝居(伊勢音頭)	藤巻 透

	初松魚ふれ来てこれぞ江戸芝居（髪結新三）	秋桜子
	卯の花や雨に蛇の目の洗い髪（源氏店）	吉之輔
	南座の長き幕間ひ鱧の鮓	木村 杏子
	二枚目の緋姿や夏芝居（伊勢音頭）	橋本 民枝
秋	菊日和かさねてさらに菊月夜（7代目菊五郎襲名）	秋桜子
	老官女お三輪いちめの秋の声（妹背山・奥殿）	秋桜子
	生締め目許凜々しく秋澄める（実盛物語）	吉之輔
	かみしもは梅幸茶とや菊薫る（7代目菊五郎襲名）	康 二
	待宵や引窓たのむ人の運（初代吉右衛門27回忌）	秋桜子
	海老蔵といへば弁慶秋芝居	丹羽 晴代
冬	ゆく年や松の太夫のかるき咳	康 二
	御園座を出る人の波十二月	今枝 すずゑ
	顔見世や名もあらたまる役者ぶり（十代目海老蔵襲名）	秋桜子
	彩をもて女は鎧ふ近松忌	佑 三
	雪の日や雪のせりふをくちずさむ	秀 山
	富士の雪晴れて旅路の母娘笠（忠臣蔵八段目）	吉之輔

前述した俳人につき若干説明しますと、水原秋桜子（1892～1981）には、芝居の句ばかりを集めた「芝居の窓」という句集があります。これは昭和41年から56年までの「歌舞伎座」の筋書につけた俳句と「明治座」の筋書につけた俳句約110句を集めた句集です。

久保田万太郎（1889～1963）、戸板康二（1915～1993）は塾の大先輩であり、特に戸板康二は歌舞伎研究会 OB でもあります。

藤巻透は歌舞伎雑誌「演劇界」で長年活躍され、昭和57年に「歌舞伎の百句」（私の芝居歳時記）を出版しています。（自ら詠んだ50句も同時に記載済）

佐藤吉之輔は慶応大学文学部卒業で、三田俳句会（丘の上）に所属し自らの芝居見物の様子や芝居内容を俳句に詠み、平成17年7月「歌舞伎鑑賞俳句日記」（具体的には平成14年10月～平成17年1月における歌舞伎座公演分）を出版しています。

自選句10句

蛇足ながら、私が俳句を始めこの1年半に詠んだ愚作の中から歌舞伎関連句10句を参考までに載せることとします。（皆様は、これを読まれると、きっとこの程度であれば「自分だって詠めるよ」と自信を持たれると思いますので）

節分や吉三の科白口をつく

陽春やゆかり名を継ぐ錦之助

団菊の勸進帳や皐月来る	夏芝居孫の手を引く高麗屋
敬老日演じる役者喜寿を過ぎ	顔見世や三千両の声かかる
助六の啖呵響くや初芝居	早梅や紅隈似合う梅王丸
春風邪か弁慶役者咳き込みし	人生は賽の目しだい春愁(刺青丁半を観て)

最近の芝居を素材にしておりますので、何となく雰囲気はおわかり頂けるのではないのでしょうか。しかし 芝居の内容に踏み込んだ句には、なつてないかもしれませんので、今後とも芝居をいろんな角度から見ることに心がけ 深みのある句を心がけ詠み続けていきたいと思っています。

最後に

稚拙なる長文にお付き合い頂きまして有難うございました。

皆様は、これからも歌舞伎を観続けていかれるでしょうか、この際歌舞伎俳句も詠んで今回発足した歌舞伎研究会ネット(三田歌舞伎)を通じ、詠んだ俳句を発表し合いダブルに楽しんでみませんか。

出来ましたら厚かましいようですが、既に俳句を手がけておられる方がおいでになれば、是非指導を兼ねリーダー役として「俳句会」を立ち上げていただければと思います。

事務方としてのお手伝いは致しますので、よろしくおねがいします。

以 上

(参考資料一覧)

- 1 「江戸時代の歌舞伎役者」 田口章子 雄山閣出版
- 2 「歌舞伎と江戸文化」 津田類 ペリかん社
- 3 「歌舞伎いま・むかし」 津川安男 新人物往来社
- 4 「芝居のなかの暮らし」 演劇界
- 5 「歌舞伎辞典」 平凡社
- 6 「歌舞伎歳時記」 服部幸雄 新潮選書
- 7 「芝居歳時記」 矢野誠一 青蛙房
- 8 「歌舞伎はるあき」 野口達二
- 9 「歌舞伎の百句」 - 私の芝居歳時記 藤巻透 明治書院
- 10 「歌舞伎鑑賞俳句日記」 佐藤吉之輔 角川書店
- 11 「舞台の奥の日本」 河竹登志夫 TBSブリタニカ
- 12 「戸板康二俳句集」 三月書房
- 13 「万太郎の一句」 小澤實 ふらんす堂
- 14 「吉右衛門句集」 本阿弥書店
- 15 「合本俳句歳時記第三版」 角川書店
- 16 「必携季寄せ」 角川書店
- 17 俳句用語用例小事典「芸術・文化を詠むために」 大野雑草子編 博友社
- 18 「芝居の窓」 水原秋桜子編